

湿疹 2024.10

◎急性の湿疹とは皮膚の浅いところの炎症で、病院では原因がわかるまでは病名は湿疹としています。原因がわかると接触性皮膚炎、アレルギー性皮膚炎などの病名になります。



◎湿疹による皮膚変化は様々で、医学的には紅斑（あかみ）、丘疹（ぶつぶつ）、小水疱（小さな水ぶくれ）、嚢胞（うみをもったみずぶくれ）、湿潤（じゅくじゅく）、結痂（かさぶた化）、落屑（かくしつのはがれ）などが単独または混在しています。

◎受診時に、「何でしょうか」と尋ねられることがありますが、経験のある医師でも、患者の生活環境がわからない場合、はっきりとした病名の診断は困難で湿疹とします。詳しい問診によって診断を推定することになります。

◎湿疹と発疹（ほっしん＝はっしん）の違いは、急にできた皮膚の変化が発疹で、突発性発疹や帯状疱疹などです。これらも含めて皮膚に持続的に炎症が起きている症状を湿疹と表現します。

◎急性湿疹は自然に治癒することもあります。放置すると慢性湿疹となり、皮膚の肥厚、色素沈着などとともに上記の湿疹の症状を繰り返すようになることもあります。

◎急性湿疹の治療は原因の除去とともにステロイド含有軟膏（ワセリンを基剤とする）の使用が基本です。約一週間を目途に効果を判定します。クリームを基剤とするものや抗生物質を含むもの、複数の基剤が混合されている市販の塗り薬にはかえってアレルギーを引き起こす物質も含まれる場合もあるので注意が必要です。

◎慢性の湿疹にはステロイド剤ばかりでなく皮膚バリア機能の保護のために皮膚の清潔、保湿管理に努めることが重要です。

◎湿疹は外的要因に皮膚が反応することによることが多いのですが、体質、ストレス、糖尿病や腎臓病、免疫異常などが関係することもあります。帯状疱疹は免疫力が低下する中年以降に発生しやすいともいわれており、がんの存在も疑う必要があります。

◎下呂市立金山病院皮膚科では皮膚科の初期診療にも力を入れています。皮膚の異常を感じたらまずは受診しましょう。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦